

「奈穂子」における喪失の問題

緒方博子

(一) はじめに

「奈穂子」という作品には、いろ／＼の要素が含まれていて、それに関連している作品をあわせ読むといっそう理解しやすいくところから、ふつう四つの「奈穂子」が考えられている。一つは、二十四章よりなる最も小さい形の「奈穂子」であり、二番目は、それに「儉の家・追記」を含み、三番目のものは、さらに、「ふるさとびと」が加わっている。四番目ののは、まだ未完の大ロマン、作者の創作ノートにメモされているものである。どれをとるかは、読者の側に任されているが、私は、ふつう「奈穂子」といわれている、二番目のものをえらんだ。そして、女主人公の奈穂子が、何を、どのようにして失い、どのようにそれを回復していきうとしたかに焦点をしばって考えていきたい。ひとくちに言えば、夢の喪失とその回復について、ということである。

(二) 母

「奈穂子」には、夢にとらえられた二人の人が登場する。奈穂子の母の三村夫人と、幼なじみの明とである。この夢をみる人々への反抗から彼女の生ははじまていく。

まず、三村夫人がどのような夢を生きたかについてみたい。それ

は「儉の家」にくわしいが、ブリリアントという字の化身のような、と描写されている孤独な作家森於蓮意との愛である。森は二度ほどO村へ夫人をたずね、ふしぎな若返えりを感じるが、「いかでかは惜しむ君の名の……」という詩をおくったきりで、ふいと北京へ旅立ってしまったような人である。三村夫人はといえば、「日本の女の誰でもが、ほとんど宿命的にもっている夢の純粹さ、その夢を夢と知って、なお夢みている女」として描かれる。それは森の連れの自動車を待っている間の放心の描写——「それはほんの僅かな時間だったのだからけれど、私A三村夫人Vには長いことのように思えた。その間、私は何か切ないような夢をみながら、それから醒めたのだが、いつまでもそれが続いているとさめられないような気さえていた」(全集4巻97頁)というところでもよく理解できる。この人達の愛は、まさしくロマンスクなそれであり、現実には、悲劇的な匂いをおびる。つまり、常にあるディスタンス—距離の感じ—をもつて、愛の純粹さを保ちつづけ、そのくるしみで、自己をむしばませていくという風な愛の姿なのである。森は北京で客死し、三村夫人は、狭心症の発作でなくなる。死をもって終わりをつげる愛の姿は悲劇としかいへようはない。

奈穂子は、母のかもしだす、この悲劇的なふんいきの中で急に少女から大人への成長をとげ、明の手のとどかないところへ行っ

まう。そして、「幸福なんていうイリュージョン、そんなものい、うつりやすいものから自由になりたい」と、はっきり幻影への拒否をいう。森のことについても、「なんでも御自分のなさりたいと思うことをしていよと思つてゐるような天才なんというものは私は少しも自分の傍に持ちたいとは思つていませんわ」(4、111べ)といふ調子できびしく母をせめる。作者は三村夫人のことばとして、「今こそ私との不和がお前から奪つたものをはっきりと知つた。それは母としての私ではない。……それは人生の最も崇高なものに対する女らしい信託なのである。母としての私は再びお前に戻されても、そういう人生への信託はもう容易には返されないのではないかろうか？」(4、116べ)といわせてゐる。奈穂子が天才を拒否し、人生の崇高なものへの信託を失つたといふことは、とりもなまらず、夢の中核をなす憧憬を失つたといふことではないのか。

母の住む夢の世界の不安さ、危険さを誰よりも奈穂子はよく知つてゐる。母の血をひいた娘なのであり、母は自己の影であるから。似てゐるが故の限らない嫌悪の情でもつて、彼女は母をはなれ、現実のこゝしか頭にないような、ありきたりの平凡な男のところへ嫁ぐ。奈穂子にとっては幻影であるにすぎない夢への訣別が行なわれる。以上のべたように母は、奈穂子の夢の喪失に関係してゐる。

(三) 明

皆がふしぎがったような圭介との結婚は、「当時彼女をおびやかしてゐた不安な生から逃れるため」(4、131べ)のものであり、「他人の家庭はその平和がいかによそ／＼しいものである」とも、彼女

にとつてはかっこうの避難所であつた」(同)。けれども三村夫人がなくなつてしまふと、そんな生活——晩飯後、つとめから帰つて来た夫と母とのながいくらしむきの話をそばで何かに耐えるようにじつときいていなければならぬような——に耐えていく理由はなんにもなくなつてしまつていふことにきづく。

奈穂子は、前から氣にいらぬ時にする空虚なまなざしをたびたびするようになり、自分のしたいことは何一つ出来ずにいる者になりがちな胸を刺されるような氣持をたえず経験し、「結婚前の失われた自分自身に対する一種の郷愁のようなもの」(同)を激しくかんじる。

このような時、偶然町で明と邂逅する。こゝが、「奈穂子」目頭の「やっぱり奈穂子さんだ」にはじまる序章になつてゐる。明は、自己を回復しようとする奈穂子の促し手として登場してくる。一つの決意を与えるものとして——。奈穂子ははっきりといつわりの自己にきづく。「奈穂子はあの孤独そうな明をみてからなぜか急にそれを(自分を)いつわつてゐるということ意識の園の上のぼらせるようになったのだつた」(4、132べ)。どうにかして、失われた自分をとりもどしたいといふ道すがたどりはじめられる。

こゝですこし明についてのべたい。明は立原道造をモデルにしたといわれている。昭和九年に、「楡の家」の前身である「物語の女」が書かれ、それからずつと、「奈穂子」の構想はあたゝめられていて、十四年、道造が夭折してから、急に明の人物創造に成功し、十六年にやつと完成してゐる。突に七年にわたる労作であつた。道造はつねに、「自分とは何であるのか、どこからきてどこへ行くか」といふ問いをいつづけた詩人なのであ

り、その筈を求めたまよった人である。明もまた、さまよえる浪漫人のひとりとしてえがかれる。人が生をどれだけ純粋な形で追求しうるかという試みでもあらうか。

明は建築事務所につとめているが、「お前はこんなところで一体何をしている？」という声をしょっちゅうきく。街での奈穂子との出合いはO村での幼時の追憶をまざ／＼と思ひ起こさせる。幼い時の奈穂子―交響曲の下から白い歯を光らせながら、自転車にのって、見て、ほら手をはなしている―と背後の明に叫ぶ―。このよるな追憶にみちびかれて、彼はN村に遊ぶ。O村の自然の一部ともなっている早苗、それからせきずい、炎でねたきりの娘をかゝえている牡舟屋のおえふなどに、空しく彼は彼のもとめるものを探すが、さだかにはとらえない。そして「自分が本気で求めているものは何か。お前は今何にこんなに絶望しているのか、つきとめたい。おれがこれまでに失ったかと思っているものだって、おれは果してそれを本気で求めていたといえるか？ 奈穂子にしろ、早苗にしろ、おえふたちにしてろ……」（4、174―175頁）と考えて旅をする。「旅人とは誰か。最も孤独な喪失者」と消遣もいう。明は意識した喪失者であり、絶望のふちにいる人である。それゆえに、奈穂子の孤独をよ／＼とよく理解する。同じ失えるものとして――高原の療養所にいる奈穂子を、旅の途中で訪れ、彼女の心のどんなにたどりにくい過程でもわかるような気がするんだが――と思う。この訪問で明は奈穂子に後にのべるような一つの促しをまた与える。

旅はさんたんたるものであった。病を得、熱と悪感で倒れそうになりながら、最後にやはり彼の夢の帰りにO村にたどりつく。牡舟屋へ行く森の中で、幻覚になやまされながら、「こんなに空しく

つてなせ生きなければならぬんだ。……それがおれの運命だとしたらしようがない」、また、「おれはとう／＼自分のもとめているものが一体何であるかもすらすわらないうちに、何もかも失ってしまったみたいだ。……今までの所ではおれはこの旅では、おれの水久に失ったものをたしかめただけではいけないのか。この喪失に耐えるのがおれの使命だということでもはつきりわかってさえないれば、おれは一生懸命にそれに堪えてみせるのだが……」（4、190―191頁）といういたましい告白をする。

しかし、森の中の幻覚は、彼のもとめているものを暗示するかのようである。「梢はまだくれずにいた。そして大きな樺の木は枯れ枝と枯れ枝とがさし交しながらうす明るい空に生じさせている細かい網目が、ふいとまた何か忘れていた昔のことを思い出せそうにした。……それはこの世ならぬ儼しいうたの一ふしのように彼を一瞬なぐさめた。……」（同）。この樺の網目が、記憶にも残っていないとうの背になくなった母の顔に似ていたのを思い起こす。扉であり、儼しいうたの一ふしのように彼を慰めを、いこわせるものであり、とりもなおさず、彼のふるさとを彼はもとめていたといえる。

おえふ達に看病されながら、明は初雪をむかえる。明はそこに自分の運命を予知する。「雪煙がさあ／＼とあがって、それが風とともにひとしきり冷い炎のように走りまわった。そして風の来るとともにそれもいつこへともなく消え、その跡のけば立ちだけが一めんに残された。そのうちまた次の風が吹いてくると、新しい雪煙があがって、再び冷い炎のように走り、前のけばだちをすっかり消しながら、そのあとに、また今のと殆んど同じようなけばだちを一面に残していた。『おれの一生はあの冷い炎のようなものだ。―おれの過

ぎてきた跡には一寸ち何かが残っているだろう。それも他の風がくると跡方もなく消されてしまうようなものかもしれない。だがその跡には、またきつとおれに似たものがおれのに似た跡を残して行くにちがいない。運命がそうやって一つのものから他のものへとたえずうけつがれるのだ」(4、194)感動的なローマン人の生涯が、みに、雪の炎で象徴されている。

彼は夢が何であるのか、なぜこんなあてもない冬の旅に出できたのかなんにもわからない。たゞどうしようもない運命の力に促されながら、求めつづけるのである。さまざまの自体が目的であるような、一見無償にみえる旅の生涯である。彼は、少年の時みたと思つた夢はもうどこにもなくて、苦しみながら求めることと自体が、一つの夢であると思つていたのではないか。明の生涯自体が、高貴で、パセテイクな一つの夢の世界である。人生でこのような浪漫人の持つ意味は、その姿に、人が、自分たちは人生において必要なものは何一つもっていないのではないかということに、はっと気づかれるところにある。偽りの自己、何か失われている自己に気づかされるのである。奈穂子もその一人である。明が生命をかけてまで、その失えるものを探している姿に胸をつかれるのである。

こゝで、三村夫人と明との夢のちがいにについて考えてみると、運命に従順な女性には、思いがけなく愛という形でその夢が実現するが、男性の方は、始終、これが自分の求めていたものなのかと、懷疑し、自らそれを放り出す。明は早苗やおえふ達に夢をみつげようと思へばできた。が、それらを去るがまゝにして、去られる苦悶を樂しむかのようだ。「風立ちぬ」の主人公も、「おれの夢想がおまえをこんな所にひっぱってきたようなものだ」といふながらも、二

人きりの生活を、もともといたものはこれなのかと疑い、女主人公の死に支えられてはじめて意味を見いだすといったふうである。夢にとらえられたものはいずれも悲劇の極相をおびるが、男性は意識のうちに、そこへ向かっているということがいえる。

明の生涯は美しく純粹ではあるが、それは、この世ではとりもなおさず死を意味している。明にかわつて、作者は奈穂子を登場させ、生へとみちびく。信州の療養所へ奈穂子は一人でおかれる。そして、孤独のなかでふしぎなよみがえりを感じる。「どこから来ているのか自分自身にもわからないふしぎな絶望に自分の心を任せきつて気のすむまでじつとしていられるような場所を求めるための、昨日までの何という渴望——それが今すべてかなえられようとしている。……あゝこのような孤独のたゞ中での彼女のふしぎな蘇生。

——彼女はこゝろい種類の孤独であるならばそれをどんなに好きだったか」(4、142)。母や夫の中の日常の重苦しさ、自分の顔つきや目つきを気にしないでいゝ、偽りの生活から自分をとりとどしたのが、このような孤独の中であつた。しかし、これがほんとうの失われた自己の回復であるはずはない。「心ならずも人の妻であつた」。自然の慰藉に満たされているような日々、彼女は、いっぽうの辭は、苦しみに悶えているような枝ぶりですっかり枯れている立木を、散歩の途中で見つけ、まるで自分のようだと思う。これは、明の象徴、雪の炎と、対象的である。

病院における二つのエピソード(これも、明と早苗、おえふの關係を巧みに照合させてあるが)が奈穂子をとらえる。一つは、白いスエーターの青年が、いゝなすけにつきそつてきていて、病状がもち直したときと、廊下ではげしく泣きだす姿をみて、無意識の嫉

妬をおぼえること、もう一つはやりかけた仕事の為に、出所して、その病を不治のものにして帰ってくる若い農林技師を身近かにかんじることである。真の愛の具現者に対して、そのひたむきに、強い憧憬を無意識のうちに感じている。「一体わたしは、もう一生を終えてしまったのかしら？」「誰かわたしにこれから何をしたらいいか、それともこのまま何もかもあきらめてしまふほかはないのか、教えてくれる者はいないのかしら？」（4、176頁）

このような状態にある奈穂子が、自分のこの孤独が、安らかさを与えるより、大へんみじめなものであるということ意識しはじめたのは、明の訪問からであった。自分よりもつゝ傷ついたり何かを求めて翹けているような明の姿を見た時からであった。明は長い間、わすにいた奈穂子を、そのさまよいの途中でたずねてみたいと思ひ、昔のようにたゞ怒ったように顔を見合せて帰るつもりだったけれど、「それなのに、この人に会っていると、また昔のように、向うですげなくすればするほど、自分の痕を相手にぎゅぐゅ／＼擦しつけなくてはすまなくなつてきそうだ……」（4、179頁）のことば通り、二人の間に流れるものは、夢みる明と、それを把握する奈穂子との相も変わらぬふんいきだったので、彼女はいら／＼する。明はそんな奈穂子をみて、「奈穂子さんだつて、昔はいつもぼくの夢みがちなのを嫌つてばかりいたが、やっぱり自分だつて夢をもつていたんだ。あの僕の大好きだつた奈穂子さんのお母さんのように……それがこんな勝気な人だものだから、心の底にその夢がとじこめられたまゝ、誰にもきづかれずにいたのだ。今の奈穂子さんだつて……。しかし夢はまあどんなに思いがけない夢だろうか」（4、180頁181）と思ふ。明は今、奈穂子を最もよく理解する。

奈穂子のふしあわせは、恐らく、母や明のもつ夢の世界への背反ということなのであるから、読者は、こゝで、明が奈穂子を母の世界へとつれもどすことを期待する。が、明へのふれあひは容易に行なわれない。

大きな鳥のように奈穂子の心をよぎつて、永遠の旅人として明は行つてしまふ。彼女はなぜ、優しいことば一つかけずにしまったのかと後悔するけれど、なお、明の前に顔をさげていたら、あとでどんなにみじめな思いをするだろうと思ふ。こんな激しい性格が、明をうけいれない。母に対する同じ反発が、こゝでもくりかえされる。あくまで夢みることを拒否し、明のすくいの手がさしのべられてもすげなくそれを払いのけ、長い孤独のくるしみの中に自分を追いやってしまふ。夢に任せざるにはあまりにも醒めすぎている。

奈穂子は、真しで美しくはあるが悲劇の匂いの濃い母や明の生き方を嫌つた。明が直視したように、思いがけない夢を實現すべく、彼女は義務づけられている。それらの世界とは異なつた生の場所を奈穂子は求めなければならぬだろう。失われたと思つた自己は、実は未だ発見されない自己であることに気づくだろう。

ともあれ、明の訪問は、奈穂子をその絶望からすくい得なかつたが、一つの大きな促しをまた与えた。「こんな陰気は冬空の下を、いま頃明はあの旅人らしくない憔悴した姿で見知らない村から村へと、恐らく彼の求めて来たものは未だ得られもせず、どんな絶望の思いをして歩いてるだろうと、奈穂子はそんな慄かれたような姿を考えれば考へるほど自分も何か人生に対する或決意をうながされながら、その幼馴染の上を心から思いやっているような事もあった。『わたしには明さんのように自分でどうしてもしりたいと思ふこ

となんぞないんだわ』……『それはわたしがもう結婚した女だからなのだろうか？そしてもうわたしにも、他の結婚した女のように自分でないものゝ中に生きるより外はないのだろうか？』（4、186―187 べ）

(四) 圭 介

ある雪の激しく降る日、あらゆるものが片側だけの雪にふきつけられているのを見た時、明もまたこの雪を浴びながらさまよっているだろうと思ひ、衝動的に汽車に乗り、東京に帰ってきてしまふ。

（この雪は、明のみた初雪である）その時のことを「あのとき心の底では、思いきって自分自身を何物かにすっきり投げ出す決心をしたのだ。それが何物であるかは一切わからなかったけれど、そうやってそれに自分をもかも投げ出して見た上でなければ、それは永久にわからずにしてしまふような気がしたのだ」（4、203 べ）という。何物かにすっきり自分を投げ出すという形で、彼女は行動を起こす。自分を守ることのみで、投げ出すということを決してしなかったのだが――。しかし、投げ出すという受身の形でしか求められないのは、奈穂子が女性であり、人の妻であるからであろうか。何物かにとは、夫の圭介であり、そうでないもつと別の人であろうか。何気がするという。奈穂子は、圭介の中にある「別の人」に期待している。圭介は、明とは正反對の、夢には全く無縁であり、俗に満足して生きる人である。母との静かな生活に満足し、かつて他人のために苦しんだことのないような人である。そんな人が奈穂子に近づきうるためには、よほどの変革が必要である。それは、奈穂子をとりにかこんでいる死を媒介として行なわれる。

奈穂子の病氣のことを、母が隠していながら、かげでいゝふらしているのをきいて、不愉快になり、いつも淋しそりにしていた妻を思い起こし、死にかけているのではないかという不安におのゝきなから療養所をたずねる。彼にとつてはじめての異状な経験―生の不安―にふれ、奈穂子の孤独を理解したかみえる。「この世に自分と息子とだけいればいゝと思つているような排他的な母の許で、二人して大事に守つてきた一家の平和なんぞというものは、奈穂子がその船姿の中心となつたふしぎに重厚な感じのする生と死との絨毯の前にあつては、いかにうすであるか」（4、160―161 べ）と考へる。自然の牢の中で一人ぼつちでしずかに死の近づいてくるのを待つてゐるような妻をあわれに思ひ、よほどつれもどそうかと思つが、日がたつにつれ、母との無事な生活を波だゝせたくない、と、やめてしまふ。

しかし、それ以來、彼は、療養所へ行く列車が、妻の存在をまぎ／＼とよび起すことを發見し、わざ／＼或窪の駅まで行つて、夕方の列車を見送つたりする。「いつもその列車は、彼の足もとから無數の落葉を舞い立たせながら、一瞬にして通過し去つた。その間、彼が食ひ入るような目つきで一合／＼見送つていたそれらの客車とともに、彼の内から一日中かれを息づまらせていたものが俄かにひき離され、いづくへともなく運び去られるのを彼は切ないほどはつきり感ずるのだった」（4、170―171 べ）。圭介はしだいに奈穂子へ近づいてゐるよゝに思へる。そんな圭介の様子を母からの便りで少しづつ知つて、奈穂子はしらす／＼ほゝえみかけていたのだが――。

信州から帰つた彼女は、「一番最初に夫がどんな顔をするか、それに自分の一生をかけるよゝなつりでもりでいた」（4、220 べ）のに、

気がついた時には、もう、以前の通りの夫婦になつていて、何もかもうやむやになりそうで人間の習慣には躊躇させる何物かがあると、非常な決心をしたつもりがはぐらかされる。

けれども、おちついた先のホテルで、二人の心のふれあおうとする瞬間がある。「お前がそんなにおれのところに帰ってきたのなら」と圭介はいおうと思ひ、奈穂子は夫が「こつそり二三日このホテルでくらすう」といふ出しそうな気がしたところである。

圭介は、そのまゝ帰つていくのだが、その矢、「二人のまさにふれあおうとしている心の瞬間のようなものを感ぜられるこの瞬間を」(1、297ペ)どんなに引きとめておきたかつたかと、作者は描いている。

圭介はいつかは奈穂子を完全に理解しうると思われる。その時、圭介は奈穂子のすくい手となるだろう。そして、彼女の思いがけない夢も実現しうるであらう。作者も、創作ノートで、其の夫婦愛の誕生といふことばを使つて、それを暗示しているかのようだ。ジャツク、シャルドンヌ風のそれである。——一人の女性をあるがまゝにうけられること、即ち、どこからどこまで、彼女自身であつて、いま若くあることも、またいつか年老いることも勝手であるところの、一人の自由な女性をうけられること——(3巻、303ペ)奈穂子はそこでいき／＼と生きられるであらう。

一人でホテルにとり残されて、彼女は、「自分が今日のように何物かに魅せられたようになつて、何か手あたりばつたりのことをしつつつけているうちに、一つ所にじつとしたきりではとらうてい考え及ばないようないくつかの人生の断面が、自分の前に突然あらわれたり消えたりしながら、何か自分に新しい人生の道とそれとなくさし示していくくれるように思はれ」(4、209ペ) と思ふ。明や母に

よつて閉じられる世界のかなたに作者がみていたものは何であつたか、奈穂子といつしよに、堀辰雄もそれを模索しているかのようだ。

(H) おわりに

以上のごとく、奈穂子は、明や母の住むゆめが、現実とのあらいによつて、どんなにみじめに破れ去るものであるかを本能的に知つて、それを拒否したといえる。(作者も、自己の中に夢をみようとする明と、それにあらがる奈穂子を見ていたにちがいない。)それは私たちにとつても大きな問題である。もつと、現実を即し、現実をはつきりみ、現実と根を張つたゆめを求めようとしたのが、奈穂子なのである。すなわち、奈穂子の喪失とは、彼女の母と同化している部分、夢みる女としての彼女の完全な喪失なのである。いや、完全なというのは、いゝすぎかもしれない。やはり、彼女の中に流れているロマネスクな血は、現実と深い絶望を感じているから——。しかし、彼女の自己の回復——あるいは創造——は、母や明とは異なる場所でなされる。明のきびしい求道の姿に促されながら、圭介にもたすけを求めながら、現実の中のゆめを、しつかりつかもうとされている。

奈穂子の明や母に反発する執拗なまでの姿、それ故の深い惨落、しかもなお、現実の中でほろびのない夢をめざす過程に、非常に心うごかされるものがあつた。次には、堀辰雄の「夢」の世界がどのような構造をもつものか調べてみたい。そうすれば「奈穂子」の夢の喪失が、どんな意味をもつかいさうはつきりすると思われから——。夢とその美しさばかり描きつゞけた作家の一つの転機とみうると思われる。